

# 仏になったたら仏を殴れ



長尾和宏著  
ブックマン社  
1650円(税込)

著者は尼崎市で25年前に診療所を開業した高名な在宅医で、日本尊厳死協会の副理事長である。難解な書名は「きれいだ」とや執着にこだわらないで捨てましょう」との意味だと記す。三島由紀夫の「金閣寺」からヒントを得た。きれいだことな



く、本気で書いた、と言いたいようだ。テーマは死である。

著者のメルマガでの質疑から45件を選んで構成した。足元の医療界にも遠慮なく切っ先を突きつけ、本気度は確かだ。

例えば「邪悪な医師とは」と問われ「医学界の方

2500人の臨終を見てきた医者が語る  
尊厳死と安楽死のあいだ

イドラインを優先する医者「自分の間違いを認めない医者、嘘をつく医者」そして最も邪悪なのが「無知を自覚してない医者」を斬り倒す。痛快だ。

単なる医療知識の披瀝ではなく、体験に基づく個人的見解を前面に出し面白い。病院や施設が行き過ぎた延命治療を強いられるのは「家族と裁判官が悪いから」と堂々と書いてしまう。コロナが疑われても「入院すると家族に会えなくなるので、自宅で死にたい」という在宅患者の要望に応えると明言する。

医療者の間違った通説にも牙をむく。脱水について、「現代医学の常識では悪とされるが、終末期には宝」と言い切る。「痰が出ない」「心不全や肺水腫にならない」「最

期まで食べられる」、だから「いいことだらけ」。

## どんな「死」にも答える在宅医

医師や看護師からの「入浴死の際の死亡診断書の書き方」「死んでしまえ」と患者につぶやく私はおかしいか」などの問いかけもあり業界話も楽しめる。だが、本書の白眉は尊厳死、安楽死に関する回答だろう。

「安楽死法をつくって」という肺がん患者の元看護師、「人間に死ぬ権利はないのか」「死ぬ権利への反対運動をどう考えるか」「鎮静と鎮痛、安楽死の違いは?」「安楽死に反対する長尾先生の本音は?」など医師をたじろがせる質問が並ぶ。

そこへ著者は、ACIP(人生会議)を繰り返しながらの尊厳死への道を死の姿として説く。京都のALS患者も、本人の要望に応じて胃妻からの栄養を減量していけば穏やかな最期、尊厳死を迎えられたはず、と言う。ところが「胃妻をいきなり外すと安楽死として殺人罪に問われる」と、違いを明かす。

2500人以上の死を診てきた現場感覚が際立つ。自殺の問題など生煮えの議論もあるが、学者の類似本よりはるかに説得力がある。